

ESD から学校における

ダンスの可能性を探る

山崎 朱音（横浜国立大学）

1. はじめに

持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development）を目指し、平成 29 年に告示された学習指導要領では、「一人一人の生徒（児童）が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすること」が目指されている（文部科学省，2017）。また、ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度として、① 批判的に考える力、② 未来像を予測して計画を立てる力、③ 多面的・総合的に考える力、④ コミュニケーションを行う力、⑤ 他者と協力する力、⑥ つながりを尊重する態度、⑦ 進んで参加する態度の 7 つが示された。ESD の実践にあたっては、「どのように学ぶのか」「何ができるようになるのか」「どのように取り組むのか」が重視されている。

2. 体育授業の転換とダンスの価値の再考

このような学習指導要領の改訂を受け、体育・保健体育科（以下、体育とする）においては、これまでの「できるようになること」を重視した授業に転換を求められることになった。そこには、正解の獲得ではなく、問題の解決に向け思考する力が重視されているといえる。つまり、「知識・技能」の習得を重視するのではない、自身や他者の身体に向き合ったり、仲間と協働して練習方法や作戦を考えるなどの「思考力・判断力・表現力」や「学びに向かう力・人間性」といった資質・能力を高めることに主眼がおかれている。

また、現在はひとつのクラスの中に、障がいの有無、人種（国籍）、能力格差等、多様な子どもがいる。体育授業においても、得意・不得意、でき

る・できないといった能力差のみを注視し学び合いを促す授業ではなく、多様な他者同士が互恵的に学び合う体育授業が希求されている（梅澤，2020）。

ダンス・表現運動は、その特性から他の運動領域と異なる要素を持つ。ダンス授業ではもともと「探求型（ゴールフリー）の学び」が展開されている。捉えたイメージを即興的に身体で表現する力、仲間と共に試行錯誤して作品を創作する力は、まさに「何ができるか」に留まらない、未知の状況に対応し、その学びをその後の自分の学びや人生に生きる力となりうるのではないだろうか。改めて ESD の視点にもどると、ここにダンスが持続可能な社会の創り手を育成する要素を過分に含んでいる点ではないかと考える。

3. 教科連携にみる学びの拡がり

ダンスと同様、表現活動を担う教科に音楽や図画工作・美術（以下、美術とする）がある。ダンス・音楽・美術に共通する表現活動は、「自分がなにをどのように表現したいのか」という”個”が尊重される。ここには、人種や性別などにとらわれない「人と違っていい、違うことが当たり前」という”多様性”の概念が存在する。

しかしながら、現在の学校教育では、表現活動を担う音楽・美術・体育の教科が独立して存在している。これらの教科が相互に連携することにより、子どもに表現方法の選択肢を与えるとともに、個別最適な学びを促すのではないか。ここで育まれる資質・能力は、ESD の目指す持続可能な社会の構築に向け、必要な学びになると考える。

4. 横浜国立大学教育学部での取り組み

現在、横浜国立大学の SDGs の取り組みの中に「ホール・ユニバーシティ・アプローチからなる持続可能な未来を創る次世代育成 Seeds プロジェクト」を展開している。そのひとつに、「竹」という素材をもとに音楽・美術・ダンスの教科で連携した学びを実践するという試みがある。

本シンポジウムでは、この実践を紹介し、学生

が試行錯誤する過程の中で、また音楽・美術・ダンスの教科連携の取り組みを通して何を学ぶのか、ESDの視点で考えていきたい。現在進行中の内容であるため、詳細については当日発表する。

引用参考文献

文部科学省（2017）中学校学習指導要領，東山書房
奈須正裕（2017）「資質・能力」と学びのメカニズム，東洋館出版社
日本ユネスコ国内委員会（2021）持続可能な開発のための教育(ESD) 推進の手引
梅澤秋久・苫野一徳（2020）真正の「共生体育」をつくる，大修館書店